

報告「タイの土地と村落を考える」にかんする討論要旨

北原氏は、まず村研の現在の共通課題である「土地と村落」に関する日本村落の枠組を、タイ村落に適用することの困難さを強調されている。そして、北原氏は、タイと日本の村落を捉える理論として、肥前栄一氏の類型（『ドイツとロシア』）を敷衍して設定される。すなわち、タイ村落は、成員無限定の「世帯原理」になつアジア型共同体、日本の村落は、成員限定の非アジア的共同体として、それぞれ特徴づけがなされている。そして、そのような枠組からのタイの土地と村落をあきらかにされている。

そこで、討論内容をみれば、第1に、タイ村落の理論枠に関して議論が集中した。すなわち、それは世帯原理を一般的に考えれば、世帯を単位とした共同体であると思はれるという点と、アジア型共同体という場合、基本的に先学としてマルクスと大塚久雄のどちらを措定するかによる相違にかんする点についてコメントがなされた。それに対して、北原氏は、前者について、共同体のメンバーが結婚により世帯を形成したときに、すべて共同体のメンバーになりうるのであり、メンバーシップが無制限に許容されている状況を世帯原理とみなしていると説明した。後者について、北原氏は、基本的に、大塚史学の立場、つまり、大塚氏の原始共同体は私的所有が未発達なうえに上位共同体が成立するという立場であるという。そして、マルクスの原始共同体の典型は、北原氏がサブタイプとしてしめた、「共同体集団による土地の共同所有と定期的割替・分与」のタイプであるとみられるが、近年の研究によると、それが普遍的なものともみられるのではなく、「特定領域内の土地の自由な個

別占有」というタイプがアジア社会のなかに見られるという議論がなされているという。

第2に、北原氏の共同体的類型化が段階論をふまえたものであるかというコメントがなされた。それに対し、肥前氏による類型論は段階をふまえた類型ではなく、特定村落を考える場合にそれが規定しているかを中心に設定した類型論であるが、北原氏は、タイ村落の実態を説明するために何が基準であるかを追究する立場をとり、段階論的なものと考えているという説明がなされた。

第3に、タイと日本の比較が困難であるという点だが、本報告のポイントなのであるが、一九六〇年代の日本とタイを比較することによつて、それは、縦断的に同じ歴史的段階にある場合には比較の可能性が高いが、異なる段階が背後にある場合には、時系列の違いのなかでの比較を意味するのであり、そのような横断的比較がいかなる意味をもつかということである。それに対して、高橋明善氏が日本の農村社会学の問題意識（自然村概念）をジャワの村落に適用して成功しているが（『現代世界の地域社会』）、ジャワの場合には、タイとちがって共同体規制が強いという点で、日本の村落と比較が可能であろう。また、ジャワの農村にも焼畑時代の痕跡がみられる可能性があり、それに村落共同体的なものが重層しているのがジャワ農村とみられるのであり、その点ではタイ農村との比較も可能といえよう。しかし、焼畑を欠如させている日本の近世村落と、村落を単位とした土地保全の機能性をゆるさないバンコク周辺の中世農村とでは比較が不可能であろう。だが、タイ農村にも種々のタイプがあり、例えばチェンマイ周辺の農村では、親族単位も大きく、村落は形態

的にかたまっており、かっちりした共同体が維持されている可能性がつよい。また、チャテップ氏の『タイ村落経済史』では、そのよ
うなタイトな側面を強調しているのであり、それらの共同体と日本
の村落とは比較が可能と思われるという回答がなされた。

以上が討論の要約であるが、そのなかで日本の村落とタイの村落
との比較が可能かということが重要な問いかけであったとおもわれ
る。しかし、現実には、それらの比較は困難さを多くもつが、その
なような比較にたいする認識は、現在の「村研」における「土地と
村落」というテーマの活性化には是非必要であるといえよう。

(清水由文)